

第1回委員会水質管理WG(2002.10.1開催)結果概要

庶務発信

開催日時：2002年10月1日(火) 10:00~12:40

場所：axビル4階 アクスネット

参加者：

委員：宗宮委員(リーダー)、川上委員、中村委員、森下委員、矢野委員、和田委員

河川管理者：水資源開発公団 関西支社管理部部長 河野氏、管理部 谷川氏、

木津川ダム総合管理所管理課係長 酒井氏

近畿地方整備局 河川部建設専門官 北野氏、河川計画課課長補佐 佐中氏、

河川調整課水質監視係長 水江氏

淀川ダム統合管理事務所 広域水管理課計画係長 井上氏、広域水管理課調査係係長 足立氏

淀川工事事務所 工事施工管理官 酒井氏、河川環境課課長 山本氏、河川管理課水質調査係係長 笹田氏

琵琶湖工事事務所 水質調査課課長 春木氏

猪名川工事事務所 調査係主任 大野氏

木津川上流工事事務所 調査課課長 宇野氏

1 検討内容および決定事項

最終提言水質部分の方向性について

- ・最終提言には、河川における水質管理に関する長期的な方向性、方針を書き込む。水質管理システムの構築など河川サイドにおける水質へのスタンスをこう変えるべきというものを盛り込みたい。

河川管理者からの情報提供

- ・近畿地方整備局から、水質に関する法令と河川管理者との関係や淀川水系におけるダイオキシンや環境ホルモン測定結果の説明があり、さらに排水情報の把握および整理など、目下検討中の水質関連施策についても触れた。
- ・別紙「琵琶湖・淀川水系からみた20世紀の水質保全対策検証検討資料より抜粋」を用いて、水質問題の変遷と住民意識の分析、水質問題対策上の問題点などの説明があった。

フリーディスカッション

最終提言に取り込むべき項目について、意見交換が行われた。

<主な話題>

- ・水質問題の今後
- ・行政への要望

- ・水質の理想像
- ・最終提言の内容・作成の段取り

2 今後のスケジュール

- ・10月24日(木)に開かれる最終提言とりまとめ作業部会に水質部分の原案を提出するため、時間を詰めて作業を行う。
- ・まずは、宗宮委員が執筆した原案を委員全員にメールで送り、メールやファックスを用いた意見交換を実施。その後、10/19(土)14:00~に第2回WGを開催し、委員全員で討論しながら最終的な原案を作り上げる。

3 主な意見・意見交換

水質問題の今後

- ・新しい河川管理の中で水質の新しいシステムをどう作っていくのかについて、ベースとなる考え方をまとめていく必要がある。(委員)
- ・30年前の河川計画は、公害防止に重点を置いていた。今後は現状の計画でいくか、または環境ホルモンなど積みり積もって人体に影響を及ぼすものについても対策をとるか、いずれかを考えねばならない。(リーダー)
この先は環境ホルモンのように50年ほどたたないと表面化しない問題が深刻化するだろう。現状がどうかというより、将来にわたって水質の安全をどのように保証していくかを検討すべきではないか。(委員)
- ・水中に酸素がたくさんあれば良いとは限らない。30年前に制定された水質汚濁防止法を現在も基準にしているのは、将来の水質システムを考えるにあたって無理がある。(委員)
- ・神戸市水道局では3つの問題を抱えている。一つ目は現在150の水質測定項目があるが、古い項目もあるうえ、新しい項目も加える必要も考えられ、見直しが必要だということ。二つ目は学生120人のうち水道水を飲むという人が5人しかいないデータがあり、いくらきれいな水を供給しても水に信頼を持ってもらっていない事実があること。三つ目には水質データの公開を、市民に要請されないかぎり実施していないこと。今後はデータの公表を義務化し、さらに水質の計画を立てて市民に公開し、意見を聞いてフィードバックしていく仕組みを作っていきたいと思う。(委員)
- ・将来に対する不安から「水道の水を飲まない」という人が増えている。今後はバイオセンサーの設置など、利用者を安心させるシステムが必要だろう。(リーダー)
- ・河川と湖では、水質問題は違ってくる。淀川水系の諸河川の水質と、琵琶湖の水質を、一緒に議論すべきか検討するべきだ。(委員)

例えば猪名川では、ゴルフ場など上流の老朽化した施設などが下流の汚濁源となっているが、琵琶湖ではそういった話を聞かない。どういう方向で水質を考えるか、整理しなければならないと思う。(委員)

- ・以前は水を浄化することに必死で、生態系について考慮していなかった。今後は、生態系を維持しながら水質を向上させる方法を模索すべきだ。(委員)
河川の水質を決めているのは、農業、暮らし、産業といった流域のあり方だと思う。暮らしや土地利用のあり方については、河川管理者は踏み込めない領域なので、検討の仕方を考えねばならない。(河川管理者)
- ・水道は高度処理設備が整備されてきたが、もっときれいな水の水源から水を取る方法も考えられる。しかし、現在の水道のシステムでは無理がある。(委員)
- ・今後は、子どもたちに安心して魚に触れてもらえるような、水辺づくりを構築するシステムを考えるべき。そのためにも水質情報協議機関の設置や、水質管理システムが必要だ。(リーダー)
- ・それぞれの機関が別々の目的で水質を調査するのではなく、統合的にデータを集めて誰かが分析するということが重要。(委員)

行政への要望

- ・土木の専門家がほとんどを占める今の河川行政システムで、将来河川を守っていけるのか疑問だ。土木専攻以外の人材も積極的に登用すべきだ。(委員)
- ・河川の調査を実施する際は経費をかけず、合理的にお願いしたい。(リーダー)
- ・市民は“水質の現状”と“水質の将来”に対して不安を持っている。いずれも、河川管理者からの情報公開が十分でなく、水質問題の原因が明らかになっていないのが根源にある。(委員)
- ・市民グループが実施している24時間の水質調査を、行政もぜひ実施してほしい。(委員)
六甲や枚方で実施したことがある。(河川管理者)

水質の目標

- ・住民、行政、専門家それぞれの水質に関する捉え方にはギャップがある。水質の基準値は行政が決めるものだが、住民が求める水質もあるので、住民の意見を聞くなどの考慮が必要となるだろう。そのイメージのギャップを検討することで今後の水質のあり方が見えてくるのでは。(委員)
- ・広い意味で水質を考えることが、流域のあり方、ひいては社会経済を変えるきっかけになると思う。(委員)
例えば「触れられる、戯れられる」水辺というふうに、将来どんな水質にすべきかを河川サイドから具体的に考える必要がある。(委員)
- ・行政側と市民側では、「安全な水」についてのイメージの違いがある。市民の意識が安全＝安心となっていないのが現実であり、問題と言えるのではないか。「安全な水」「安心な水」とはどいういったものか、検討しなければならない。(委員)
- ・例えば、住民が自ら水質のデータをとることで安心感を得ることもできるのでは。また、住民の協力が得られれば面的なカバーもできることになる。(委員)
- ・「循環型社会」を支える水質という考えもあるのでは。(委員)

最終提言の内容・作成の段取り

- ・最終提言には、河川における水質管理に関する長期的な方向性、方針を書き込む。水質管理システムの構築など河川サイドにおける水質へのスタンスをこう変えるべきというものを盛り込みたい。(委員)
- ・循環型社会といわれる今、ぜひ「循環型社会で水質を維持することがどういう役割を果たすのか」について書き込むべきだ。(委員)
 - 例えば、工場でも水をすぐ川へ排水せずに、循環利用すべきだろう。(委員)
- ・川のそばに住む住民に、最終提言作成に何らかの形で参加してもらいたい。(委員)
- ・河川での不法行為を見張り、通報する市民がいるといいのでは。(委員)
 - そのような役割は、中間とりまとめで記している「河川レンジャー」が当てはまるので最終提言に盛り込んでどうか。(委員)
- ・かつて、川の浄化機能は霞堤や内湖で自然になされていたが、今では土地開発などで消滅してしまっている。今後はできるだけこれらを元に戻すことと、これらに代わる浄化システムが必要ではないか。(リーダー)
- ・河川管理者に対する提言は、社会全体に対するコンセンサスでなければならない。単なるアイデアとしてではなく、そのアイデアを持続的に検討して具体的な仕組みなどに反映し、市民が検証したものを提言として出す必要がある。(委員)

以上

説明および発言内容については、随時変更する可能性があります。

最新の結果概要については、ホームページでご確認ください。